日本医史学雑誌第三十三巻二号
昭和六十二年四月三十日発行　昭和六十一年七月二十五日受付

# 津軽における最初の全身麻酔

## ――藩医三上道隆の事績――

松木明知

## 一、はじめに

華岡青洲[1]が文化元年（一八〇四）十月に全身麻酔下で乳癌の手術を行って以来、その令名は全国に響きわたった。そして華岡流の外科を学ばんと欲する者が全国から蝟集した。その急増の度合は、文化元年（一八〇四）以前十年間の入門者がわずか三十五人であったが、文化三年（一八〇六）以後の入門者が二百八十四人に達したことでも容易に理解出来よう。[2]～[4]

このように青洲生前に約一千名、歿後から明治十五年までに約一千名の計二千余名が、その門に学んだのであるが、津軽からも数名の医師が青洲の門に学んでおり、藩医三上道隆もその一人であった。

華岡流外科の最も得意とする全身麻酔下の手術に関連して、本間玄調、鎌田玄台の事例以外の門人たちの具体的な手術名などを含む業績は案外知られていない。[5]

著者[1]は以前華岡流の全身麻酔が明治三十年の佐賀県において施行されたことを報告したが、今回津軽においても華岡塾に学んだ三上道隆による全身麻酔下の手術についての事例が判明したので報告する。

## 二、津軽における最初の全身麻酔

内藤官八郎（一八三二～一九〇二）は、幕末に弘前藩の日記役で、明治維新後は明治四年（一八七一）から藩庁租税掛りを勤め、さらに廃藩後には弘前市の近在の尾上村や船沢村で塾を開いた。彼は維新前後の世情の急変を歎いて、文政年間から廃藩前後までの弘前藩の藩政そのほかに関する事績を編集して、明治十五年（一八八二）に「弘藩明治一統誌」[7]と冠して津軽家に献上した。原本は今文部省史料館の所蔵になる。

その中の「人名誌」の中に「医家之部」が収められ、佐々木元俊、小野秀篤、北岡太本、北岡太淳、三上道隆、唐牛昌雲らの事蹟が述べられている。

今この中の三上道隆の部について少し長いが左に引用する。

本町五丁目　三上　道隆

氏ハ文政ノ人ニシテ幼稚ノ時父ニ後レ道春ノ事母ノ養育ヲ経テ人トナリ年廿二ニシテ長崎ニ走ル、性素ヨリ活発温良謙順文学アリ念胆最モ清シ書画ニ名アリ正亀ト称ス、外科本道ヲ修シ研究ノ砌ハ一ヲ聞テ十ヲ悟ル気象アリ、竟ニ医ノ三道ヲ明ラム、数年ノ后弘前ニ帰着病疴ノ患者日一日百員ヲ助ク、或日婦人ノ瘡毒ノ為ニ鼻柱色ヲ変ス腫レ痛ム婦人年二十ナリ殊ニ乳腫物ノ為重瘡ノ難困却、既ニ命没ヲ計ラント欲ス、氏ニ来リテ哭泣、黙止カタシ、診察ヲ執ル、言テ曰ク両症甚タ篤瘡ナリ、一片快セハ一片疵付ク、併若婦ノ重スル所ハ鼻ナリ、是ヲ切断セスンハ一生ノ面前耻ル事モアリ、乳腫物ハ囲ノ内ナリ、他ニ耻ル所ナシ、中年輩ハ不可ナルモ若婦切断ノ法ヲ以テ副鼻セハ何ノ障リナシ、命没ノ障リモナシ、副鼻シテ如何ト。若婦面前ノ耻ヲ改正セントハ何寄ノ幸慶ナリ、併音声ノ通樋ト副鼻ノ形骸如何ト。氏ハ笑テ通樋ハ常ト成ル副鼻ノ方向ハ継目ノ左右有リテ正面ハ何ソ元ノ如シト、婦再拝シテ喜ブ。

玆ニ於テ氏ハ是ヲ肯テ婦ニ寄薬ヲ与ヘ昏迷セシメ流法ヲ以テ鼻ヲ採断ス、一片ノ鼻ニ薬ヲ包ンテ傍ニ置キ本鼻ノ穴道ノ毒ヲ掻キ除キ穴ヲ掃攘シ性毒ヲ取除ケ削キタル、一片ノ鼻ヲ口中シ本鼻ニ手ヲ覆フ事一時廿分、而して薬ヲ両鼻ニ附シテ縫フ、膏薬ヲ上ニ糊シテ婦人ニ蘓薬ヲ与フテ元ニ復サシム、婦喜ヒ泣涙シテ謝ス、悟シテ曰ク暫ク言辞ヲ嬉ヨ三日間飲食ヲ嬉ヨ、殊更ニ小鼻ノ動キハ悪シト教ケリ、一週間ニテ鼻ノ継目ニ肥皮ノ印ヲ見ル、夫ヨリ二週間ニシテ全ク快ヘ声音鼻動元ノ如シ、僅ニ側面ニ継肉ノ疵テ見ルモ正面ニ障リナシ、其ノ他梅毒ハ更ナリ、外科ニ預ルヘキノ症各々即功ナル登記スル逞アラス、本道漢学医モ巧妙ナリ、門下ニ歩ミヲ入ル、患者市ヲ成セリ名誉素ヨリ表旗シ藩医ノ大師タリ、惜カナ、元治元年年四十二足ラヌニ中風ノ症ヲ帯ヒテ治法ノ診察ヲ解キ開業セリ、患者門前ニ来リテ急テ請フト雖、診察ヲ執ラス、地ニ伏シテ泣ク者数人中興外科漢学医ノ者婆ト称セラル嗣子前田彦市弟道春ナルモ青森ニ遷リ后札幌ニ至ルモ所在詳カナラス

右を要約すれば、文政年間生れの三上道隆は、幼くして父を失ったが、二十二歳で医学の研究のため数年間長崎に赴き、数年後に帰郷した。あるとき瘡毒に悩む二十歳の女性に対して寄薬を与えて昏迷させ、鼻を切断して病巣を除き、切断した鼻を再接着させ、蘓薬を与えて意識を回復させた。二週間で回復し、外見、発音も全く手術前と同じであったという。残念ながら元治元年（一八六四）中風を煩って廃業した。

右の記述は、旧弘前藩士、しかも日記方の経験を有する人物の手になるもので大筋としては十分に信拠出来る文献である。

「寄薬」を与えて意識を失わせたとあるが、これは全身麻酔薬と見て何ら差し支えあるまい。おそらく「奇薬」の誤記と思われる。当時としては、大変珍しい効能の著しい薬であったから「奇薬」とも称されたのである。「奇」と「寄」は発音が同じであり、誤記としてよい。現在でも「麻酔科」が「麻酔課」と誤られるのと同じである。

手術が終ってから道隆は患者に「蘖薬」を与えているが、これも華岡流の薬剤投与法である。オランダから伝来したエーテル、クロロフォルムによる方法を除けば、当時の日本で全身麻酔下に手術を行ったのは、華岡流外科の流れを汲む者以外になかったから道隆は華岡の流れを汲む医師であったことがこれで分る。

しかも鼻を部分的ながらも一旦切断し、それを再接着していることは、当時としては洵に困難な手術であったと思われる。切除、切断ならば簡単であるが、再建術は現在でも困難な技術であるからである。手術中切断された鼻を再接着のため圧迫した時間も具体的に一時間二十分と明記していることも、手術が行われたことの真実性を高めるものである。

道隆は藩医であり、患者が道隆を尋ねているから、手術が弘前で行われたことも間違いない。

しかし正確な時期は不明であるのは残念であるが、元治元年（一八六四）に脳卒中で倒れているから、それ以前のことには間違いない。現在遺された藩の記録に徴しても関連した記事は発見出来ず正確な期日の同定は不可能である。

著者のこれまでの研究によって、右の例が津軽における明治以前の唯一にして最も古い全身麻酔下の手術例である。

## 三、従来の史書に現われた三上道隆

三上隆道については、従来知られる所が少なかった。「津軽旧記伝類」[8]には、「三上道隆正亀、（後道淳）世々医を以業とす、書を善くし、筆跡の美なる他の書家に超出せり。寧親公印代、寛政九年稽古館（学校の名）にて、白文尚書を上梓せる時、道隆をして板下を書せしむ。或時筆道修行の者、道隆か書を見て、京師と雖かかる艶しき書躰ハ鮮しと嘆美せりとぞ。斎藤長門旧記。下沢氏抄録。」とある。「弘前市寺院縁起志」[9]の天福山天徳寺の項には「三上正亀　字は道隆、後に道淳と改む。世々医を以て業とす。正亀書を能くす、寛政九年稽古館に於て出版の白文尚書の板下を書く、歿するの年月詳ならず」とあり、「津軽藩旧記伝類」の記述と同じである。また「明治以来弘前市医史」[10]には「三上道春　父前田幾次郎　養父三上道隆　弘化二年生」とある。前者の「道隆」と後者の道隆の関係はこれだけでは不詳である。

最近弘前市博物館は、弘前市の墓碑について詳細な調査を行い、報告書[11]を作成したが、その中で貞昌寺に現存する数基の墓の中から、前述の三上道隆正亀の墓として、明治四年（一八七一）二月に歿した道隆の墓碑を採録している。これは大きな誤りといわねばならない。墓碑に「道淳」でなく「道隆」とあることと、これに加えて年代が余りにも離れ過ぎであるからである。

以上述べたように、従来の史書に現われた三上道隆についての記載は断片的であり、一部は誤っている。

## 四、分限帳に現われた三上家の系譜

華岡塾に学んだ三上道隆が、世々医を業とする三上家の何代目に当るかを弘前市立図書館に蔵するところの諸分限帳[12]について検索した。

同図書館には、元禄八年（一六九五）を最古とする分限帳または分限元帳が存するが、三上家の人物が次のように初見するのは「寛延三年改分限元帳」である。

一、金拾両四人扶持　　三上道順
宝暦六子十一月朔日　表医者被仰付　新規御擬作被下置之、同八年七月三日永之暇被下置之

右によって三上家の道順が宝暦六年（一七五六）表医者として初めて召抱えられたことが判り、これによって道順が初代で第七代藩主信寧の時代であることが判明する。しかし道順は二年後の宝暦八年（一七五八）、理由は不明であるが、「永之暇」の処分になっていることは注目される。何か不都合のことをしたためであろう。

右の次の条には、

金拾両四人扶持　　三上道順
天明三年二月病死。同八月十五日跡式無相違倅道隆へ被下置表いしゃ被仰付之

とあり、初代道順が天明三年（一七八三）に死亡したこと、跡嗣は道隆であることが知られ、確かに右の次の条には、

一、金拾両四人扶持　　三上道隆

と記載されている。

「文化二年改分限元帳の中に、三上道隆の名を求めると「医者」の項に、

一、金拾両四人扶持　　三上道隆
文化四年卯年十二月七日奥通被仰付、同六年巳年七月四日先祖之名道淳与名改願之通、同九申年十二月十五日老人扶持勤料被下置御近習格被仰付候

道隆は「道淳」と襲名したが、親は「道順」であり、「順」と「淳」は発音は同じであるが字が異る。

「御近習医者格」の条を見ると、次のように記載されている。

一、金拾両四人扶持外老人扶持右同より　　三上道淳

文化十一戊年正月四日病死　同年三月朔日跡式御給分無相違忰道周江被下置表医者被仰付　親是迄勤料者被差引候。

とある。二代目の道淳は文化十一年（一八一四）に歿して、三代目が道周であることを指す。

次に「文政十一年六月改分限元帳」によって、三代目の道周は天保九年（一八三八）十二月朔日に死亡し、忰道純へ家督を譲ったこと、四代目の道純は天保十三年（一八四二）三月に隠居して、忰である五代目の道隆が跡を嗣ぎ、道隆は小普請医となったことが判る。道隆は非常な勤勉であったので、天保十四年（一八四三）には表医者に昇進した。

一、金拾両四人扶持　表医者道純跡
　　三上道隆
天保十四年六月朔日医業出情手広く病用相勤候ニ付表医者被仰付候

「嘉永四年改分限元帳」によれば、道隆は慶応三年（一八六七）十二月に隠居し、家督を忰道春に譲った。道春は三上家の六代目である。道春は慶応二年（一八六六）正月、御番見習として採用され、同四年（一八六八）八月、医学館の外科教授に任命された。これによって道春は外科の専門であったことが知られる。

明治維新となって道春は、六拾二俵壱斗を給せられたが、明治二年（一八六九）には青森や松前に出張して医療に尽し、このため勤料を拾俵給されている。翌三年（一八七〇）五月十三日には、「医学学頭兼監察」に任命されている。「医学学頭」とあるが、どのような組織の学頭であるのか判然としない。

安政五年（一八五八）に藩校とは別に町在医の拠金によって医学館が設立され、文久元年（一八六一）附属薬園を設け、文久二年（一八六二）には種痘館を増設した。しかしこの医学館は明治元年（一八六八）二月廃止となった。

同じく明治元年（一八六八）五月に従軍医師の養成のため新規に「外科稽古所」が設立されたが、当時の名簿に三上道春の名は披見されない。

函館戦争中に設けられた病院も戦争終結と共に明治三年（一八七〇）三月廃止され、九月には別に医学寮が設けられたが、設立当時の名簿に三上道春の名前を見出し得ない。

したがって現在のところ、三上道春が明治三年（一八七〇）五月に任命された「医学学頭」はどんな組織の長であったか、詳かにすることは出来ず、後日を期したい。

分限帳に見られる三上家の代々については以上の通りであるが、渋江抽斎の手になる「直舎伝記抄」[13]中にも二代目道淳の名前が散見されるが、記述の内容は分限帳に記された以外に追加すべきものは何もない。

また永沢得右衛門の編する所の「津軽史」[14]の中の医家の部にも二代目の道隆（道淳）についての記載があるが、前出史料「津軽旧記伝類」などと同じ内容である。ただ注目すべきはこの中に、二代目道隆の弟で後に分家して別に藩医として一家をなした三上家の代々についての記載がある。ここでは直接関係がないので、代々を記すに留めておく。

初代　耕庵　二代　隆圭正璋　三代　泰庵雅敏
四代　耕庵正明　五代　耕雲正秀　六代　敏造

前に示した諸分限帳によれば、初代の耕庵は寛政二年（一七九〇）六月に表医者として召抱えられた。五代の耕雲は実は四代耕庵の弟で、四代に子供がいなかったので弟が家督を嗣いだのであった。

以上によって、道順を初代とする三上家の代々は次の通りである。

道順―道淳[2]（初め道隆）―道周[3]―道純[4]―道隆[5]　（右肩の数字は代数を示す）

## 五、過去帳及び墓碑から見た三上家の代々

各種史料や分限帳によっても、三上家の代々の正確な歿年月は大半が失われているため、三上家の菩提寺である弘前市新寺町の天徳寺を尋ね、過去帳および塋域について調査した。

まず墓について述べる。墓碑は現在では貞昌寺の境内にある。天徳寺は貞昌寺の末寺である。三上家の墓は写真1に示すように全部で八基現存しているが、前列に三基、後列に五基あり、後者の五基が重要である。

写真 1　三上家の塋域

最古の年号を有するのは、前列右端の宝暦十一年の「安室妙穏信女」であるが、続柄については不詳である。

次に古いのは写真2に示す、後列右より二基目の「了三院譲覚玄明居士」で右側面に「天明三癸卯年二月十五日」、左側面に「三上道順墓」とある。これは分限帳に見える「天明三年二月病死」とある記載と一致する。過去帳の十五日の条に「了三院譲覚玄明居士　天明三卯二月　三上道隆父」とあるから間違いない。(写真3)

後列左から二基目は、碑面に「随法院但応受楽道淳居士　蓮乗院喜誉妙観善了大姉」とあり、右側面に「文化十一早戌年正月朔日」、左側面に「嘉永六癸丑年十一月廿三日」とある。過去帳の記載も同様であり、二代の道淳夫妻の墓である。分限帳には四日の死亡となっているが、届出が遅れたものである。

後列左端は三代道周の墓で、碑面は「善了院即誉往安道周居士」とあり、没年は右側面に「天保九戊年十二月二十六日」とあり、過去帳の記載と一致す

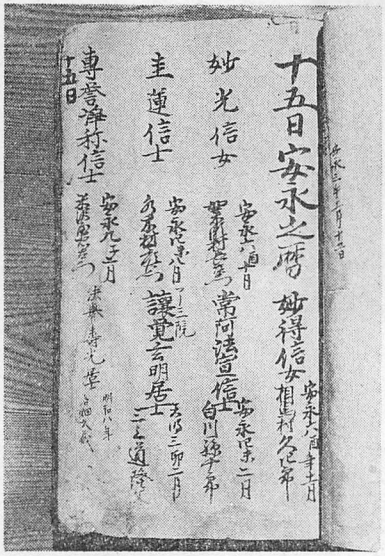

写真 3　過去帳に見える初代道順の法名

写真 2　初代道順の墓碑

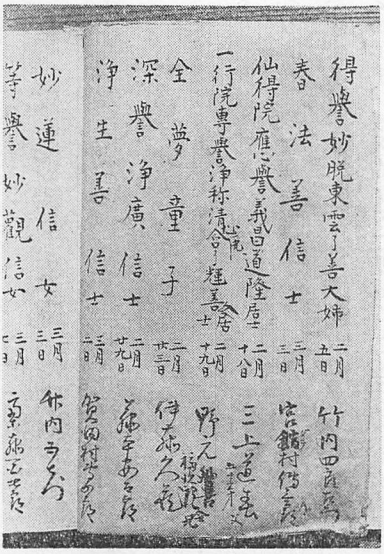

写真 5　代道隆の法名

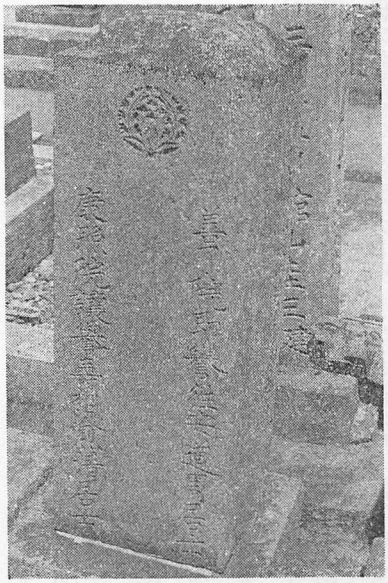

写真 4　三上家 3 代と 4 代の墓

る。分限帳は二十六日の死亡となっているが、これは届出上の問題である。

この墓碑の正面には、前述の道周の法名と並んで「康照院譲誉寿相兪清居士」と刻され、左側面に「嘉永元戊申年八月四日」とある。過去帳の同年月日の条にも「康照院譲誉寿相兪清居士　嘉永元申八月　三上道純事卅三才」とある。

これによって天保十年（一八三九）に三代道周の跡を襲った道純もわずか三十三歳で歿したことが判明した。

後列右端の墓碑は五代道隆のもので、三行に刻まれた碑面の文字は「仙得院応誉義昌道隆清居士　貴法院一誉妙体大姉精学院俊誉政了居士」とあり、右側面は「明治四辛未年二月十八日」、左側面は「明治廿二年二月十日」とある。過去帳には「仙得院応誉義昌道隆清居士」の歿年月は明治四年（一八七一）二月十八日で「三上道春ノ父　五十三才」とある。（写真5）「貴法院……」は道隆の妻で明治三十七年三月十五日に歿した。明治二十二年十二月十日に歿した「精学院」と道隆の続柄は不明であるが、あるいは息子かも知れない。

後列中央の墓碑は六代道春夫妻以下の墓で、道春の法名は「杏林院圭誉道春居士」で明治三十八年四月五日に歿し、その妻「安養院……」は明治三十年（一八九七）十月二十三日に歿した。

七代の二郎は昭和三十二年に歿している。

以上の墓碑および過去帳の調査によって分限帳に現われた三上家代々の正確な法名と歿年月日が判明したのである。

## 六、五代道隆について

以上の研究によって、弘前で全身麻酔下に手術を行ったのが、三上家五代の道隆であることが判明したが、なお二、三の問題が残されている。

天徳寺の過去帳によれば、道隆が死亡したのは明治四年（一八七一）で、数えで五十三歳であったという。そうすると文政二年（一八一九）の生れということになる。家督相続をして小普請医となったのは天保十三年（一八四二）で二十三歳、

表医者となった天保十四年（一八四三）六月には二十四歳ということになる。

文政二年（一八一九）の生れであるから、前に掲げた内藤官八郎の記載の「氏ハ文政ノ人ニシテ」という記述と矛盾しない。

しかしその次の「幼稚ノ時父ニ後レ（道春ノ事）」とある「道春」は、道隆の父の意であるから六代目の道春ではなく、内藤の記述の誤りである。四代の道純は過去帳の記述によれば、嘉永元年（一八四八）数えの三十三歳で歿しているから、文化十三年（一八一六）の生れとなり、文政二年（一八一九）生れの五代道隆の実父ではあり得ない。恐らく道隆の兄ではないかと推定される。

文政十一年改分限元帳には「一金拾両四人扶持　道周跡　三上道純　天保十三寅二月朔日隠居願之通跡式無相違忰道隆江被下置小普請医被仰付候」とあるから、少くとも道周の忰として跡を嗣いだものの道純は多分病弱のため隠居を余儀なくされ、道隆が跡を襲ったものである。

したがって道隆の実父は、三代の道周と目される。道周は天保九年（一八三八）に歿したから、この年道隆は十九になっていたはずである。十九歳であれば「幼稚ノ時」という表現は正確といい難い。もちろん戸籍上父であった道純は嘉永元年（一八四八）に歿しているから道隆二十九歳の時に当っており、益々「幼稚ノ時」の表現とは合致しない。二代道淳は文化十一年（一八一四）の歿年であるから道隆出生以前で、考慮の対象に入らない。

このようなことから道隆の父は道周と目され、内藤が「道春の事」と記したのは、「道周ノ事」の誤りと思われる。「春」と「周」は比較的発音も近似しているから誤っても無理もない。

内藤は「年廿二ニシテ長崎ニ走ル」とあるが、現在のところ道隆が長崎に赴いたか否かは判然としないが、二十二歳とすれば天保十一年（一八四〇）に当る。

しかし道隆が紀州の華岡塾に入門したのは、「春林軒門人録」[2]によれば、天保十四年（一八四三）九月四日となっている。

これより三ヶ月前の六月朔日には、医業出精を賞せられて表医者に昇進している。もし内藤の記述が正確とすれば、天保十一年（一八四〇）に長崎に出立して、一旦弘前に帰り、大いに治療に出精して表医者に昇進し、それから三ヶ月後に再び紀州に赴いたことになる。これでは少し無理があり、やはり表医者となってから紀州の華岡塾へ入門したと解した方が無理がない。華岡塾で何年間研鑽に励んだかは知るところがない。

内藤は、道隆が元治元年（一八六四）四十歳未満で脳卒中に罹患したとしたが、文政二年（一八一九）生れとすれば、四十五歳になっており、記述に矛盾があるが敢えて異を唱えることもない。内藤の記述が必ずしも些細な点に至るまで正確であるとは限らないからである。

## 七、おわりに

天保年間華岡塾に学んだ弘前藩医三上道隆が、明治以前に弘前において全身麻酔下に若い女性の鼻切断再着術を行っていることを報告した。さらに分限帳、過去帳、墓碑などによる調査を行って、道隆およびその代々の系譜を明らかにした。

擱筆するに際して種々御協力を戴いた弘前市立図書館の方々、弘前市新寺町天徳寺の住職相馬貫雄師に感謝の意を表する。

## 文　献

（1）松木明知　麻酔科学史のパイオニアたち—麻酔科学史研究序説—　克誠堂　一九八三年　三〇頁
（2）呉　秀三　華岡青洲先生及其外科（複刻）　思文閣　昭和四十六年　一二一～一九四頁
（3）森　慶三、市原　硬、竹林　弘編　医聖華岡青洲　医聖華岡青洲先生顕彰会　昭和三十九年　四三頁
（4）藤本　篤他　華岡青洲　邪賀町華岡青洲をたたえる会　昭和四十七年　二三頁

(5) 前掲 (2) 一二〇～一九二頁
(6) 前掲 (1) 三四～三七頁
(7) 内藤官八郎 弘藩明治一統誌人名録 弘前市立図書館蔵
(8) 津軽藩旧記伝類 みちのく双書第五集 青森県文化財保護協会 昭和三十三年 四六四～四六五頁
(9) 中村良之進 弘前寺院縁起志 陸奥史談会 昭和八年 三三頁
(10) 田沢多吉 明治以来弘前市医史 私家版 昭和十八年 九五頁
(11) 弘前市立博物館、弘前の墓 昭和五十八年度墓確認調査報告書 弘前市立博物館 八七頁
(12) 松木明知、花田要一編 津軽医事文化史料集成 岩波ブックセンター信山社 昭和六十一年所収 二一頁・三二頁・四六頁・七一頁・八頁・九三頁
(13) 渋江抽斎編 松木明知解説 直舎伝記抄 岩波ブックセンター信山社 昭和六十年
(14) 永沢得右衛門 津軽史 世家三十三 大正七年 青森県立図書館蔵

# First General Anesthesia by Dohryu Mikami in Tsugaru

by
Akitomo MATSUKI

After Seishu Hanaoka's sensational success in excision of a breast tumor of Aiya Kan under general anesthesia in 1804, many students who wanted to take lessons at Hanaoka's private school of medicine gathered around him from all over Japan. This is clearly shown by the fact that the students numbered only thirty five for ten years before 1804 but they increased to 284 for ten years after 1804.

A total of twelve medical students entered his school from the Tsugaru area.

Dohryu Mikami was one of them, entering the school in 1843 after S. Hanaoka's death.

The details of his medical career and his family are not known yet. However, according to "Koh-han Meiji Itto shi" by Kanpachiro-Naito, before 1864, Dohryu Mikami performed a replantation of the nose of a girl who suffered from syphilis under general anesthesia. She recovered completely from surgery after two weeks and she had neither cosmetic suffering nor any speaking disability.

The author also investigated historical documents and Mikami's grave to clarify his familial relationships.